

静物誌
和泉克雄

詩集

静物誌

1980～1985

和泉克雄

和泉克雄(いづみかつお)

1916年東京本所生れ

詩集「練習曲」「純粋酒」「夜の旅」ほか

園芸書「水草のすべて」ほか

日本現代詩人会・神奈川詩人の会・水草研究会各会員

〒228 相模原市鶴野森322-12

静物誌

© Katsuo Izumi

発行日 1985年9月25日発行

著者 和泉克雄

発行者 神保 力

発行所 一風堂

東京都豊島区東池袋4-27-5

ライオンズプラザ315

電話 03(971)8524 振替 東京4-74191

印刷+製本 埼玉福祉会

定価 2,000円

目次

雨月	密室	雨注	密行	露座	密航	人間	花木	肖像	静物
96	86	76	66	56	46	36	26	16	6

密生	雨天	密林	雨後	密書	時間	空地	落日	石仏	未来
98	88	78	68	58	48	38	28	18	8

雨樋	密語	雨滴	密会	雨域	密事	冥界	夜景	星座	物象
100	90	80	70	60	50	40	30	20	10

密壳	雨水	密漁	雨夜	密議	幻在	密奏	原点	苦汁	消滅
102	92	82	72	62	52	42	32	22	12

雨戸	密教	雨衣	密告	雨雲	密使	怪魚	睡眠	戦争	風景
104	94	84	74	64	54	44	34	24	14

位置	薄明	蟠螂	絶滅	花守	天使	仮眠	密葬	葛藤	密封
196	186	176	166	156	146	136	126	116	106

卵箱	反復	空木	循環	野守	花簾	花路	形質	密談	燠火
198	188	178	168	158	148	138	128	118	108

言葉	主役	鈴虫	薔薇	故郷	標的	対話	密計	硝子	密通
200	190	180	170	160	150	140	130	120	110

飛魚	年輪	幻灯	絵馬	渡守	花心	奈落	空転	密造	解体
202	192	182	172	162	152	142	132	122	112

後記	啓蟄	火花	献花	晩年	埋葬	風化	密雲	新年	密約
204	194	184	174	164	154	144	134	124	114

静物誌

静物

朝夕にみつめても静物のところはわからない
それはその体形と密なかかわりを示しながら
まったく別の在り方をしているようにみえる
それはその体質そのもののようにみえながら
逆用のなにかをひそませているようにみえる
その位置に満足している顔にみえる時もあり
それ以外に在りようのなかったものとしての
静かな日常的な不変の姿勢にみえる時もある

そのありふれた一個の静物だけで在るものの
そのかたちがおりににはゆがんでみえたり
すぐにもこわれくずれそうにみえたりしても
それがそのもののころであるとは言えない
どこに置かれても自分でうごいたことはない
他をおしのけて自ら存在を示したこともない
ころなどはないだろうと言われて久しいが
なにかを隠し通そうとしていることは確かだ
静物は静物であるというほかないのであるが
ながらくそこに在るゆえ朝夕にみつめさせる

未来

なんとも言いようのないかたちの物体らしく
みえるときもあるがまったくかすんでみえる
ときが殆んどで丸い点が無数に在りそれらが
伸縮自在のさまざまな光彩でかこまれている
横着な軟体動物がねそべったすがたともみえ
重くねっとりとした濃い青のながれのなかの
小さなぶろんず像にみえたがとおもった直後
てのひらの上の木像に粗く彫られて倒立して

すさまじい鬼面の列におののいている絵巻も
遠くなったり近くなったりしているあいだに
ひじょうに安らかな姿勢を示す丘があらわれ
ひじょうに美しくなまめかしいものに変った
とおもっているとそれが今までの夢の伴侶で
そのなかを奇妙な虫が長い列をつくっている
無限に張られたすけた網のなかを走りながら
なにかがどこかへ脱出しようともがいている
そのまわりを蝶のかたちの人工衛星のように
いつまでもとぶものをとらえようとしている

物象

四季折折の花のなかにも物らのすがたがある
さまざまな記号や文字や標識や幾何学的な線
聖者に似た小さな生きものの顔やその信者達
ひじょうにいとしいものの部分図や解剖図や
透明な齒車やきん色のはさみやばら色の耳や
美しい丘の遠望などのかたちをした草色の眉
貴石を磨く眼やらせん状の口やきつつきの舌
ともみえるものがさまざまないろどりでいて

光の小部屋に坐ったり斜に立ったりしている
どこかへ誘おうとしたりどこかへ跳びだそう
としている未来的なそれらをながめていると
それらのなかに今の自分もいることがわかる
いつの間にか化石となっている今までの時間
かぎりなく浮遊しようとするこれからの意志
それらがさまざまな好みのかたちの物になり
ひとつの器官のなかでかすかにゆれていたり
まったくうごかずにといたりしているそれらの
匂いのなかの昼と夜のくりかえしのその折折

消滅

ぼろに埋まる日常よりもなにもなかった日が
なつかしくなりいそいそとそこへかえりたく
なるときをひんぱんに感じるようになった
無への郷愁か自然回帰とでもいうのだろうか
いままでは眼を光らせてどん慾とまで言われ
衝動的に盗むようにひろうようにえたものも
ときのながれとともにそれなりの古色をおび
ちりにまみれ垢に包まれてぼろとなるだけの

悲のすがたとなつてゐるのをながめてゐると
突然それらのすべてをすててしまいたくなる
すると消滅への装い終の惜しみでもあろうか
ぶ然としていた物達がにわかに愛らしくなり
それらはそれなりにそれぞれの位置をしめし
自分でちりを落しほこりをぬぐいしみを洗い
うたげに臨むようにいっせいにかがやきだす
自然にきわめて自然に物としておわるまでは
在るままの証しをゆるされることそのみが
消滅への喜びであり無への静かな道であると

風景

曲りくねってはところどころがへこんでいて
腐蝕して部分的にはさびた針状になっている
レールの上に怪獣の死体のような鉄屑の塊の
機関車があつてその附近の草地の緑は濃厚で
たで・はこべ・たんぼぼ・すみれ・のいちご
などがすき間もなく茂るなかにひとりの男が
長く寝そべっていて彼方の工場の屋根の上に
綿雲があまり新しくはない色でうかんでいる